

石黒広昭編著

『街に出る劇場—社会的包摂活動としての演劇と教育』

(新曜社) 2018年7月25日 A5判 232頁 本体2400円+税

石川純子(立教大学)

本書はパフォーマンスアーツ、主に演劇を用いた実践に関わっている人々が各自の実践を丁寧な、時には情熱的に記した本である。現在、演劇は劇場のみならず社会の様々な所で行われている。本書ではその実践の中でも、参加者が受動的ではなく、能動的な参加者となる演劇を取り上げている。つまり本書で演劇は、人が人と関わるための媒介物であり「他者とともに新たな世界を作る力を養う活動」(i)として扱われている。

編者である石黒は、本書は「パフォーマンスアーツがもつ、人間の成長に対する可能性を問う書である」(9)としている。これに呼応する形で、本書では国内の様々なパフォーマンスアーツを用いた実践が持つ、その実践特有の意義が紹介されている。各実践の意義の多様性を知ることが、上記の石黒の問いを考えるきっかけとなるように本書は構成されている。

本書の著者達は、非常に多岐に渡る。また、本書で彼らが活動を行なっている場所、対象としている人々は非常に多様な背景を持っている。その多様性故に、一見すると著者たちの活動は点在しているようだ。しかしこれらの実践を「社会的包摂活動」という一本の線で繋いだのが本書である。石黒は「本書全体を通して何か一つの主張をしているわけではない」(11)と述べているが、本書の主たる主張は次の石黒の一文に集約されると思われる。それは「多様な人々がそのままいることを尊重し、その多様性を内包した社会を形成して行く主体として、その一人ひとりに期待する」(ii)という一文である。本書では、各実践がこの期待にどのように呼応し、展開しているのが記されている。

本書は4部から構成される。第1部は2つの公立劇場が、市民にとっての劇場に対する意味付けの変化をどのように促し続けているのかが各館の館長や職員、更にはプロの演出家の視点から描かれている。

第2部は演出家、日本語教育者、戯曲翻訳家、NPOのボランティアが紛争地域に暮らす人々や外国にルーツを持つ人々などの「価値や文化の狭間にたつ人々にとって劇や演じることがどのような意味を持っているのか」(71)を観劇や演劇ワークショップ等の各々の実践を通して描いている。

第3部は、3人の大学教員が日本の教育における演劇実践例を記している。彼らが行っている吃音の小学生を対象としたサマーキャンプや教員養成課程における演劇実践の可能性の詳細が記述されている。

第4部では、大学教員、舞台芸術家、劇団運営者である高校教員の3人が釜ヶ崎や小学校での絵を描くワークショップ、福島での高校演劇を通して「アート之力」(169)について語っている。

この本の著者たちは共通して、パフォーマンスアーツの体験は、参加者に直接的に答えを与えるものではないことを提示する。むしろ、その経験を通じて参加者自らが考え、また自らが他者との新たな関係性を築こうとする機会を提供するのであるという。例えば、第1章では過疎地域の公共事業としての演劇製作実践を通じ、市民が地域での新たな社会的役割を発見し、またそれを継続する新たな枠組みを自立的に創造し続けている様子が描かれている。公共の事業が答えを提示し、人々がそれに従った訳ではない。参加者は、演劇実践を通じて自らの新たな役割が何かを思考し、それによって新たな関係性を継続的に育んでいくのである。これを石黒は「パフォーマンスアーツは「他者」と出会うだけでなく、「他者」と対話する場を創り出す」(205)と述べている。

本書は、パフォーマンスアーツを媒介とした社会的包摂実践の展開を希求する読者に対して重層的な視座を与え、更には新たな問いへと導いてくれる良書である。